

# 京都人文学園の形成と変容

—— 知識人・労働者による教育空間と社会運動の関係史 ——

奥村 旅人\*

はじめに

—— 知識人と労働者・市民・農民が創る「学校」 ——

## 1 研究の課題

1920年代に創立された「労働学校」や「自由大学」を皮切りに現在に至るまで、農民学校、常民大学、市民大学などと名乗る組織的な教育空間が、学校教育システムの外部に設立されてきた。こうした教育空間はカリキュラムや教育内容、教育方法などの点で学校を模してはいるが、いわゆる一条校として教育制度上に位置づいているわけではない。学校教育システムに組み込まれていることそれ自体が存立の基盤・理由となる一条校とは異なり、これらの教育空間はそれぞれに存立の理由をもって設立されてきたと言えるだろう。

例えば、日本労働学校や大阪労働学校など戦前期に創立された「労働学校」は、同時代の学問が「ブルジョアのためのもの」であることを批判し、学問を「プロレタリア」に資するものに創り変えようとするのと同時に、労働運動の担い手を養成するという責務を負っていた。このように、学校外の「学校」は何らかの〈運動〉によって駆動され、存立の理由を与えられてきたと言える。

いわば、そうした「学校」は同時代の学校教育システムに対する批判的思考、学校教育の対象拡大、あるいは高等教育機関で主に生産・伝授される「学問」の担い手の創造などといった、「教育」の変革を志向する思想（＝〈教育の文脈〉）と、同時代の労働や政治、文化に対する批判的思考に基づいた労働運動・政治運動・文化運動の担い手の養成や、それに対抗する労使協調主義的な教化運動など、社会運動の要請（＝〈運動の文脈〉）との交差点上に形成されてきた。これらの教育空間は、〈教育の文脈〉と〈運動の文脈〉を合わせ持っており、また二つの文脈

---

\* おくむら たかひと 京都大学大学院教育学研究科

は相互に規定し合っていると言えるだろう。

だが現在、「学校」を駆動してきた〈運動の文脈〉は、少なくとも「労働学校」や「農民大学」を生んだ労働運動・農民運動に即してみる限り、その勢いを潜めている。こうした状況において、一条校とは様相の異なる学びを醸成してきた「学校」の存立基盤はどこに求めることができるのか。筆者の問題関心は以上のような点にある。

こうした関心を踏まえて本稿では、京都人文学園がどのような〈教育〉と〈運動〉の文脈の上に形成されたのかを、史的事実を跡づけながら検討する。

## 2 研究の視角

上に述べたような〈運動〉は、必ずしも一枚岩ではない。例えば、労働組合を基盤とした労働運動、いわゆる無産政당을基盤とした政治運動、芸術や文学などに依る文化運動など、戦前期にはすでにいくつかの社会運動の領域が存在していた。さらに1970年代にはいわゆる「新しい社会運動」が隆盛し、〈運動の文脈〉は複雑性を増している。

後に詳述するが、京都人文学園は労働運動・政治運動と文化運動という、重なりつつも性質の異なる〈運動〉が交わる地点に創立されたと筆者は考えている。より具体的には、1920年代から日本労働総同盟などの労働組合に関わっていたマルクス主義者、住谷悦治を中心として形成された「友山荘」グループと、1930年代に「反戦・反ファシズム」を基調として雑誌や新聞を発行する文化運動を展開した、新村猛を中心とした『世界文化』グループとの邂逅によって、京都人文学園は形作られた。

実のところ、同じ〈運動の文脈〉の内部に位置していても、労働運動や政治運動を志向する知識人と、文化運動を志向する知識人は決して一枚岩の存在ではなく、ときに対立する関係にあったと言って良いだろう。一例として、『世界文化』の同人であったねずまさしの回想を引用しておこう。ねずはまず、『世界文化』の特質として「政治運動」や「政治的偏向」が強い「従来のプロレタリア文化運動」に「背を向け」ていることを挙げたうえで、「政治運動」に参画する知識人たちが『世界文化』に向けた態度を以下のように回想する。

要するに、政治の領域には一切タッチしない、文化と学問の問題は、その領域で解決するという宣言である。[中略]これが、『学生評論』の同人から、また清水三男（最初は宮内勇の日本共産党中央奪還派のために働き、その解散後再建されるや、再建委員会のために活動する）という「プチブルの玩具」として敵視された理由である。<sup>1)</sup>

政治運動に身を置く歴史学者である清水三男と、政治運動から意識的に距離を保った『世界文化』同人との間には、亀裂のようなものを見て取ることが出来る。ねずが続けて述べるこ

ろでは、こうした態度は清水に限らず、京都帝国大学に籍を置きつつ政治運動に参加した学生や知識人に一般的なものだったようだ<sup>2)</sup>。

権力的なるものへの対抗という点では軌を一にしながらも、その方法をめぐっては敵意もとることができる言葉を投げかけあっていた彼ら知識人は、敗戦直後の京都において、知識人の文化団体が叢生するなかでやがて活動を共にしていく。例えば、京都で「もっとも早く結成された」<sup>3)</sup>（1945年10月17日）文化団体である京都自由人協会には住谷と新村がどちらも名を連ねており、また同協会の目的にも、「文化啓蒙と政治教育」が併記されるなど、労働・政治運動と文化運動の接合を見ることが出来る。

一方で、労働組合や政党に基盤を置いて〈運動〉を展開する知識人たちと、文学・美術評論などの文化批判に基盤を置いて〈運動〉を展開する知識人たちは、やはり別の文脈を形成していく。敗戦後から1950年代へと時代が進むにつれて、住谷悦治など労働組合に関わりを持つ知識人たちと、新村猛などそうではない知識人たちは、活動を異にしていくと言って良い。この点については、本稿の記述の中で明らかにしていこう。本稿では前者の知識人たちの人的なつながりを〈労働・政治運動の文脈〉<sup>4)</sup>、後者の人的なつながりを〈文化運動の文脈〉と呼び、〈運動の文脈〉の下位領域として設定しておく。

京都人文学園は、〈運動の文脈〉／〈教育の文脈〉の重なり合いの上に誕生・活動した教育空間であり、かつ労働・政治運動に基盤を置いた知識人＝〈労働・政治運動の文脈〉と文化運動に基盤を置いた知識人＝〈文化運動の文脈〉との交流とせめぎあいに、その〈教育の文脈〉は影響されていたのではないか。これが、本稿における仮説である。

### 3 先行研究の検討

京都人文学園に関しては、関係者によってまとめられた回想記・沿革史<sup>5)</sup>や、戦後京都の歴史を描くなかで言及するものに加え<sup>6)</sup>、学園自体を主題とする先行研究が蓄積されてきた。その基本的な視座は、京都人文学園を1930年代の「文化運動」の延長線上に位置づけ、その「教育運動」「文化運動」としての独自性を明らかにしようとするものである。こうした視座に立つものとして、山崎雅子や久田邦明の研究が挙げられる<sup>7)</sup>。山崎は、新村猛らが発行した雑誌『世界文化』を「対抗文化」創出の試みと位置づけ、その試みの延長線上に京都人文学園の「教育運動」を位置づけた。久田は、京都人文学園が発行していた新聞「水曜日」を読み解きながら、「自由教育運動」の可能性と限界を浮き彫りにし得る素材として学園の実践を位置づけている。

両者に共通するのは、京都人文学園の存立期間のうち、新村猛や久野収が活動していた昼間制時代（後述）のみを扱っているということである。そのため、夜間制に移行した後の教育活動の様相は明らかにされておらず、また京都勤労者学園への改組の意味も研究の射程には入ら

ない。

こうした先行研究に対して本稿では、夜間制に移行した後の活動をも視野に入れ、京都人文学園の通史的な記述を行う中で、その教育活動の内実の揺れ動きを捉えることを試みる。

## 第1章 昼間制各種学校・京都人文学園の形成——1946年6月-1949年3月

### 1 京都人文学園の概要

まず、京都人文学園について概観しておこう。京都人文学園は、1946年6月に開校した3年制の各種学校である。「立身出世の具」に墮し、「暗記」に注力するあまり「観察と推理との力の涵養」を行わなくなった従来の学校教育のあり方を批判し、知識の一方的教授ではなく、「後進」を「先進が掖導する」<sup>8)</sup>ことを重視して「行動の人として思考し思考の人として行動する」人を育てようとした。そのための具体的な実践として、試験や出席を廃止するなど、「新しい教育と学問の構築」<sup>9)</sup>を目指した教育機関であった。

1946年には50人の募集に対して100名を超える入学者を迎えた同校は、新学制整備などの社会の変化に伴い、次第に学生の数を減らしていく。また学生の欠席や講師の休講、財政難などの問題を抱えるようになり、1949年には昼間制の学習者を迎えることなく、1950年からは夜間制の各種学校へと運営形態を変化させた。夜間制となった京都人文学園の定員の充足率は回復を見せるものの、財政難を克服することは容易ではなく、1957年、京都勤労者教育協会と合併して京都勤労者学園となり、各種学校京都労働学校の運営を始める。京都労働学校は夜間の開講で、1日2科目週6日、年36週にわたって、社会科学や労働問題、その他広く教養に関わる講義を行っている。

以上が、京都人文学園が存続した11年余りの概略である。それでは、この存続期間の中で、京都人文学園の運営を担った知識人たちの人的交流はいかなるものだったのか、そしてそれは同学園の教育活動にどのような影響を及ぼしたのかを以下では検討していこう。

### 2 京都人文学園と「友山荘」グループ

先にも触れたが、この京都人文学園誕生の端緒は、「友山荘」に集った人々と『世界文化』『土曜日』の中心人物であった新村猛の出会いに見て取ることができる<sup>10)</sup>。まず、友山荘やその構成員について概観しておく必要があるだろう。友山荘は、住谷悦治、及びその妻よし江の妹・栄子の夫に当たる、堀江友広が中心となって構想した「文化事業」である。

住谷と堀江の略歴も示しておこう。住谷は1895(明治28)年群馬県群馬郡国分村に生まれ、1919(大正8)年東京帝国大学法学部入学、1922(大正11)年に同大学を卒業すると同志社大学に講師として入職する<sup>11)</sup>。ほどなく教授に昇格するも1933(昭和8)年に治安維持法違反と

されて逮捕されたことで、同志社大学を退職する。翌年から1936（昭和11）年まで留学生活を送り、1937（昭和12）年に松山高等商業学校（以下、松山高商）の教授となる。しかし1942（昭和17）年に同職も辞することとなり、アジア・太平洋戦争の終結までは文筆活動で糊口をしのぐことになる。戦後はまず1945（昭和20）年に夕刊京都新聞の論説部長、社長の職につき、1949（昭和24）年に同志社大学に復帰、1963（昭和38）年に総長に就き、1975（昭和50）年に退職する。1987（昭和62）年に死去した。

住谷は東京帝大在学中に新人会<sup>12)</sup>に入会し、マルクス主義に接近すると、同志社大学への就職後には高野岩三郎や森戸辰男、山本宣治ら労働運動と関わりの深い知識人たちとともに労働者に向けた教育活動を行った。その住谷と行動を共にし、学究生活を支えたのが住谷の「義弟」<sup>13)</sup>、堀江であった。堀江は1922（大正11）年に早稲田大学を卒業すると、製造工場の取締役を経て戦闘機の部品製造を行う「堀江商店」を創設するなど、戦時中に一定の財を成した人物である<sup>14)</sup>。

住谷と堀江が、敗戦直前の1945（昭和20）年春に構想したのが「友山荘」であった。先述のように堀江は戦時中に一定の財を蓄えており、その使い道を模索していた。資金の用途についての相談を受けた住谷は「文化事業の振興」<sup>15)</sup>を提案し、その結果立ち上げられたのが友山荘である。友山荘は以下のような事業の実施を目的とした。

- (一) 働らく人々のための教育機関の設立、
- (二) 貧しい人々たちのための診療所の設置、
- (三) 美術工業の工場を設け上村六郎氏を中心に優良な製品を作製販売する、
- (四) 音楽学校——とくに音楽は幼少年からの教育が必要であるとの上村けい子女史の意見によって、少年少女のための音楽教育機関を設置、
- (五) 伊谷賢蔵氏を中心に絵画研究所が設置<sup>16)</sup>

京都市文学園はこのうち、「(一) 働らく人々のための教育機関」の具体化として創立されたものである<sup>17)</sup>。住谷は戦前期に大阪労働学校<sup>18)</sup>で講師を務めており、「働らく人々のための教育機関」として念頭に置いたのは「労働学校」であったと考えられる。大阪労働学校が、日本労働総同盟で活動していた賀川豊彦によって設立されたことに鑑みると、構想段階では、京都市文学園は教育や学問の刷新と同時に、労働運動に資することも視野に入れた機関であった可能性は否めない。

### 3 『世界文化』グループと京都市文学園

この事業の実現に向けて、住谷は戦前からの人脈を活用することになる。住谷が、「働らく人々のための教育機関」の設立という理念の担い手として協力を仰いだのが、1930年代から私的な繋がりを持ち、敗戦後は京都自由人協会などで行動を共にしていた新村猛であった。新

村の経歴等については本小特集の藤野論文に詳しいので、ここでは戦前期における新村の活動を概述しつつ、住谷との関係を明確にしておこう。

新村が戦前期に行った主な文化運動は、反戦・反ファシズムを基調とする総合雑誌『世界文化』と、週刊新聞『土曜日』の発行であった。両雑誌の執筆者はほとんど重なっており、前者は「アカデミック」な、後者は「より多くの一般大衆向け」のものであるとされている<sup>19)</sup>。『世界文化』は1935（昭和10）年から1937（昭和12）年まで、『土曜日』は1936（昭和11）年から1937（昭和12）年まで発行されたが<sup>20)</sup>、1937年11月8日から治安維持法によって同人の検挙が相次いだことで、両者とも終刊へ追い込まれた<sup>21)</sup>。こうした活動の同人には、新村のほか久野収や和田洋一など、のちに京都市文学園で活動する知識人が含まれていた。

『世界文化』はアカデミックな論調を持ち、読者層も比較的限られていたが、それをより広い読者を獲得する活動へと拡大したのが週刊新聞『土曜日』の発行であった。その創刊に関わったのが住谷である。

住谷は先述の通り、1933（昭和8）年に治安維持法違反の咎で検束されたことをきっかけとして職を失い<sup>22)</sup>、経済的に窮乏することになる。住谷は1937（昭和12）年に松山高商に職を得るまでの間、ジャーナリズム活動を軸とした執筆活動によって生計を維持することになるが、そのような状況のなかで、『土曜日』の発刊に携わっている。『土曜日』が発刊された1936（昭和11）年7月という時期の住谷は、京都で雑誌や新聞への執筆活動に勤しんでいた。住谷の執筆活動は多方面にわたるが、そのうち『文藝春秋』の記事<sup>23)</sup>を目にして住谷を訪ねたのが、松竹俳優・斎藤雷太郎であった。

当時の斎藤は、松竹で俳優を務める一方で『京都スタジオ通信』という新聞を発行していた。当時、新聞には「有保証」「無保証」の区分があり、保証金がないと「時事問題」を新聞に載せることができなかった。斎藤は「金五百円」の国債を保証金として『京都スタジオ通信』を有保証とし、それまでの「京都の撮影所に働くひとびとの親睦と向上」という目標を改めて「映画人以外の人々」に時事問題を論じさせることを試みる。執筆者を探した斎藤は、『文藝春秋』で住所を知った住谷を訪ね、「新聞の性格を説明して原稿をお願い」する。それを受けた住谷は、近くに住む同志社大学の同僚で、『世界文化』の同人であった能勢克男を紹介する。この人脈はさらに同じく『世界文化』同人の中井正一にも拡がり、ついには『世界文化』同人の多くが執筆し、かつ、より多くの人々に読まれる新聞、『土曜日』が誕生することになった<sup>24)</sup>。

住谷自身は『土曜日』の同人とはならず、創刊号（1936.7.4、号数は『京都スタジオ通信』から通算されているため12号となる、以下同様）、38号（1937.8.5）、39号（1937.8.20）、41号（1937.9.20）に記事を投稿したに過ぎないが、『土曜日』の創刊はまさに住谷が斎藤と『世界文化』の同人との結節点の役割を果たしたことによってなされたものであると言えるだろう。この『土

曜日』創刊を通して創られた新村ら『世界文化』同人との人脈をもって、住谷は「働らく人々のための教育機関」の創立を具体化することになる。

こうして「友山荘」グループと『世界文化』グループは合流を果たし、1946年3月、新村の起草による「規約」が発表される。

[...] 従来の学校教育は立身出世の具に供せられ勝ちとなり、延いては観察と推理との力の涵養はおろそかにせられ、暗記力がおのづと重視せられる結果を招き、学校に於ける教科目も徒に細分される傾きがありましたが、私たちは右のやうな弊風を打破し、早くから学問をあまたの分野に区切ることなく、基本的な諸学科について、その対象と成立と発達  
の跡とを懇ろに説き、またその研究方法を教えつゝ、自主的な思考人、しかも単に思考に秀でた知識人ではなくて、「行動の人として思考し思考の人として行動する」やうな近代人を養成したいと意図するもので [...] 私たちの学校は教育すると云ふよりもむしろ学び究めようとする後進を先進が掖導することに本旨が存し<sup>25)</sup>

このなかで新村が批判しているのは、細分化された「学問」を暗記させる学校教育の方法のなかで「観察と推理の力」がないがしろにされたことであり、またその結果として「自主的な思考人」が養成されなかったという事実である。そこで京都人文学園は、「後進を先進が掖導する」ということを活動の軸として、試験の撤廃、生徒自治などといった方法を採用し、そのために学校としての認可を受けず各種学校であり続けた<sup>26)</sup>。この「京都人文学園規約」には、上の文章のほかには講師の選定や財政的な援助者からの独立が盛り込まれており、学校教育機関の財政的拠出者である国家によって「偏向」させられた学問の暗記や、「自主的な思考」の能力涵養を疎かにする態度によって、「平和と自由」に寄与する人々を育てることができなかった戦前の学校教育への批判的な態度を見て取ることができる。

いわば新村は、反ファシズムの立場からの学校教育のあり方に対する批判という〈文化運動の文脈〉あるいは〈教育の文脈〉に基づいて京都人文学園の方向性を決定しており、この時点では、もう一方の創立主体であった住谷らが身を置いていた、〈労働・政治運動の文脈〉の影響は看取できない。

#### 4 昼間部の科目編成——「人文主義」的教育と「友山荘」グループの離脱

それでは、新村を中心として設立された京都人文学園はどのような教育活動を展開したのだろうか。別表1は、京都人文学園の開講科目、及びその担当者の一覧である。なお、同じ担当者が複数年度同様の科目を担当した場合には同列に、同様の科目で担当者が変わった場合には一行下に配置してある。そのうえで、科目を①～⑩の科目群に整理した。

昼間部時代の開講科目（1946年度から1948年度）は科目番号①から⑩であり、その内容は、①一般教養、②論理学・哲学系科目、③歴史学系科目、④社会学系科目、⑤経済学系科目、⑥法学系科目、⑦時事解説、⑧自然科学系科目、⑨基礎教養科目、⑩語学系科目である。

この時期の「カリキュラム」の特徴として指摘できることは、まず教養やいわゆる人文科学に関する科目の比率が高いということであろう。新村が自ら担当した「一般教養」、唯一の専任講師だった久野収が担当した「論理学」「哲学」に加え、歴史学の講義が充実している。「国語」などの基礎教養科目が置かれている点からも、教養を重視する姿勢がうかがえる。語学系科目も充実しており、英語のみならず、フランス語やドイツ語、ロシア語、エスペラントに至るまで、幅広い言語が教授された。

もう一つ指摘しておかなくてはならないことは、住谷をはじめとする「友山荘」グループの知識人たちが講義を受け持っていないということである。昼間部の京都人文学園の教育は、〈文化運動の文脈〉——新村や久野収ら『世界文化』同人たち——に基づいて始まったと言って良いだろう。

## 第2章 同時期の京都労働者教育史と京都人文学園の変容 ——1949年4月-1957年3月

### 1 京都人文学園の運営体制の変化——昼間部から夜間部へ

こうして教育活動を開始した京都人文学園であったが、必ずしも順調に運営が続いたわけではない。京都人文学園が主な対象とした青年たちが日中の労働を開始し始め、また新学制が整備されるのに伴って、次第に学生募集に困難をきたし始める。1948年に入学した第三期生は、第一期生、第二期生の「一〇〇名前後」に比べて「三〇名」<sup>27)</sup>という少なさであり、創立時に堀江友広らから寄付された資金以外は事業収入に依存している同学園は、財政危機に陥ることとなる。

入学者減少の主な原因は、上で述べたように昼間に通うことのできる青年の減少であった。そこで学園は存続の手段を夜間制への移行に求め、夜間部設置委員会を設けて協議を始める。そして1949年4月、京都人文学園は昼間部を廃止し、夜間の各種学校へと移行する。

上野輝将は、この夜間部設置をもって、京都人文学園の性格が「自由大学的」なものから「労働学校的」な性格に転換したという見方を提示している<sup>28)</sup>。上野は、夜間部設置という出来事以降の京都人文学園を「労働学校」的と形容することによって、それまでの学園の性格が変化したことと、その性格が後の（現在の）京都勤労者学園を母体とする京都労働学校と連続性を持っていることを示唆していると言えるだろう。また石田良三郎は『京都地方労働者教育史』のなかで、この夜間部設置の意味を、京都人文学園が「勤労者のための教育機関となるこ



とに自らの使命を見出し」たものと評し、さらには財政難と向き合いながら1956年まで運営を続ける中で、「人文主義」教育から「勤労者」教育へと学園の目的が変化したことを指摘する<sup>29)</sup>。先行研究においても学園の性格の変化が指摘されるこの夜間部設置においては、京都人文学園を担う知識人の様相にも様々な動きが見られる。

表1 京都人文学園の運営体制移行に関する年表（筆者作成）

年 月	事 項
1949. 1	夜間部設置委員会発足
1949. 4	夜間部発足
1950	主事佐々木時雄が京都市役所、新村猛が名古屋大学、久野収が学習院大学へ就職
1951. 6	「関西文理学院」開校
1956. 4-9	常任委員会・最高運営委員会が労働組合員を主な対象とすることを協議
1957. 3	社団法人京都勤労者学園に改組

もっとも大きな変化は、夜間部移行直後に、昼間部時代の京都人文学園において中心的な役割を果たしていた『世界文化』系知識人たちが学園を離れることである。昼間部の学生は、1950年2月をもって全員が卒業することになるが<sup>30)</sup>、その後間もない同年6月には、新村猛と久野収が相次いで大学（前者が名古屋大学、後者が学習院大学）への就職を決断し、学園の運営から実質的に退いている<sup>31)</sup>。

それと前後して、当時の京都における〈労働・政治運動の文脈〉の中にいた知識人たちが、京都人文学園の活動に参入し始める。再び別表1を検討しながら、教育活動の担い手の変容と講義科目の変化を見ていくことにしよう。

## 2 京都地方労働組合協議会主催「京都労働学校」との人的交流

改めて確認しておく、昼間部の科目は大きく分けて①一般教養、②論理学・哲学系科目、③歴史学系科目、④社会学系科目、⑤経済学系科目、⑥法学系科目、⑦時事解説、⑧自然科学系科目、⑨基礎教養科目、⑩語学系科目という領域で構成されていた。

夜間部への移行によって生じた変化を、二つ挙げておきたい。一つ目は、④社会学系科目と⑩語学系科目（「エスペラント」を除く）が廃止されたことである。二つ目は、⑪社会思想系科目、⑫現代社会分析系科目、⑬労働問題系科目が追加されたことである。

追加された科目を担当した主な知識人たちは、次のような人々であった。

⑪の主な担当者<sup>32)</sup>：岸本英太郎、細野武男。

⑫の主な担当者：河野健二、岡本清一、前芝確三、北村敬直、里井彦七郎、尾崎彦朔、島恭彦、内海義夫、木原正雄。

⑬の主な担当者：西村幸雄、渡部徹、岸本英太郎、高桑末秀。

夜間部になって新しく参入した彼ら知識人の多くは、同時代の京都において〈労働・政治運動の文脈〉に属する人々が展開した教育活動である、京都地方労働組合協議会の「京都労働学校」で講師を務めた人々であった。ここで、京都において1940年代後半に展開されていた、〈労働・政治運動の文脈〉に基づく教育活動を概観しておきたい。

当該時期の全国的な労働運動の動きから見ておこう。敗戦後、合法組織として「復興」した労働組合は、まず1946年に全日本産業別労働組合会議（産別会議）や日本労働総同盟（総同盟）といった連合体を結成し、全国的な労働運動を開始する。しかし、1947年2月1日の「二・一ゼネスト」が未遂に終わったことをきっかけに連合体の再編が進み、共産主義の勢力を弱めた日本労働組合総評議会（以下、総評）が1950年に創立され、産別会議や総同盟に替わって労働運動の代表的な連合組織となる<sup>33)</sup>。

敗戦後の京都でもこうした動きに連動した労働運動が展開され、政治運動を展開した左派政党運動（日本共産党、日本社会党）とともに、労働者に対する教育活動を行っている。文献史資料によって存在が確認できる、京都における労働者に向けた組織的な教育機会の一覧を以下に示しておこう（参考に資するため、戦前期の教育活動も記載している）。

表2 京都における労働者に向けた教育活動（筆者作成）

学校名	開始年	運営主体
京都労働学校	1924	総同盟京都連合会→京都無産者教育協会
総同盟労働学校	1929	京都労働者教育協会
労働組合全国同盟労働学校	1929	
京都人文学園	1946	
京都労働学校	1947	京都地方労働組合協議会
労働講座・労働学校	1954	京都勤労者教育協会
京都勤労者学園	1957	

1940年代後半に活発に展開したのが、「総同盟、K・K・R、産別、全官公」<sup>34)</sup>の4組合の連合体、京都地方労働組合協議会（以下、地労協）による教育活動である。地労協は、1947年7月から1949年までの間に、「京都労働学校」と称する1期3ヵ月の講座を計6期開催した。この「京都労働学校」は入学に際して「各自の労働組合に如何に参加しているか」を選別のための質問として問うなど、労働組合運動との密接な関わりを持って開講された。その講義科目と担当者の一覧を別表2に示してある。

担当者の一覧を見ると、上に挙げた⑪～⑬の新設科目群の主な担当者と重なっていることが分かる。具体的には、岸本英太郎、島恭彦、細野武男、高桑末秀、渡部徹の5名が重なっている。京都人文学園の夜間部移行に伴って生じた科目の増設という変化は、京都の〈労働・政治運動の文脈〉＝地労協による教育活動に参画していた知識人が、京都人文学園にも参入したということの意味してもいる。ちなみに、昼間部の京都人文学園では講義を行わなかった住谷悦

治は、この「京都労働学校」では講義を担当している。

こうした事実と、新村猛や久野収の就職という事実を考え合わせれば、夜間部への移行という変化は、京都人文学園の〈教育の文脈〉を規定している〈運動の文脈〉が、『世界文化』グループを中心とした〈文化運動の文脈〉から〈労働・政治運動の文脈〉へとその基調を変化させた出来事であると捉えることが出来るだろう。

### 3 夜間部の出発と再びの財政難

こうして1949年4月に発足し、〈労働・政治運動の文脈〉を強めつつ教育活動を開始した京都人文学園夜間部は、第一期生に117名を迎え<sup>35)</sup>、少なくとも入学者数という点では順調なスタートを切る。第二期生は95名、以降第三期生から最後の入学生である第八期生まで、最も少ない年でも75名の入学生を迎えている。

しかし、学園の財政難は改善には向かわなかった。その主な原因は、入学者の定着率の低さであると言って良いだろう。例えば、第一期生と第二期生のうち卒業者はそれぞれ46名、36名であり、半数以上は卒業を前に退学している。このことから、学園の最も大きな収入源である授業料収入が運営を安定的に支えられるほどのものではなかったことを推測させる。

そこで学園が取った対策が、校舎が空く昼間を活かして、予備校事業を開始するというものであった。この事業は1951年4月、卒業生の儀我正三郎、学園主事佐々木時雄、大阪市立大学教員の北村敬直を中心として「関西文理学園」として創立された（なお、北村は科目番号⑫の主な担当者である）。関西文理学園が京都人文学園に財政補助を行うという財政基盤が確立し、1951年度は歳入総額386,810円のうち125,000円（約32%）を、次年度から最終年度の1956年度に至るまでは、歳入総額の40%から50%に迫るまでの割合で京都人文学園の財政を支えることになる。

しかし、このような運営体制は関西文理学園側からの申し立てによって揺らぐことになる。その様相は1956年12月1日に開催された「講師会議」の議事録（資料編に翻刻を収録）に見て取ることが出来る。「講師会議」は、京都人文学園の中心的な講師陣、細野武男、渡部徹、安永武人、北野正男と学園主事・佐々木時雄、卒業生・余廷寿によって開催された会議であり、学園の財政的窮状と今後の方向性を決定するための集まりであった。

そこで司会を務めた細野の発言からは、関西文理学園から京都人文学園に寄せられた要求を見て取ることが出来る。

文理との問題は2年程から前で話し合いがつかず尾をひいている。現在は年50万円の3ヶ年分を分割又は一括どちらでも希望通りの方法で渡すということになっている。

文理の問題と文理が要求する人文の経営方針の批判は沢山聞いており、欠陥の事実は共通するがその原因については意見の相違が沢山あるし、いろいろな点ですっきりしていないが、3年間に150万円一括なり分割なりでわたすが3年後の事はその時に話したらいいということが何べんも話した結果出て来ている。<sup>36)</sup>

独立の事業として財政的な成功を収めた関西文理学園は、京都人文学園の「経営方針」を批判し、150万円をいわば「手切れ金」として払うことと引き換えにその後の財政援助を断とうとしていることが分かる。当時京都人文学園運営の中心にいた渡部徹<sup>37)</sup>は後に、安永と渡部に対して関西文理学園の中心にいた和田洋一が「打ち切り」を告げたという経緯を回顧している。

私が安永武人君から人文学園を引きついだのは一九五六年四月で、当時、学生数が減じ、財政的にジリ貧状態にあったのを打開することが課題であった。[中略] 財政的援助を仰いでいた関西文理学園から横槍が入ったことである。安永も私も、年五〇万円の援助を信じ、何某君 [渡部が財政復興を託した京大時代の知人のこと：筆者] を伴って和田洋一さんに挨拶かたがた確認を求めたところ、あと三年で打切るとのことである。安永君は憤慨して [後略]<sup>38)</sup>

1956年末時点で京都人文学園は、再び財政基盤崩壊の危機に立たされていた。

そのなかで立ち上がっていたのが、京都勤労者教育協会（以下、勤労協）との合併という方向性である。それはこの「講師会議」の主題でもあった。当時、京都には労働者を対象とした教育機関が二つ並立していると認識されており、その統一によって双方の存続を確かなものにするということが狙いであった。こうして京都人文学園は——一部の卒業生や講師からの反対にあいながらも——京都勤労者学園への改組に向けて動き出すことになる。以下では、合併の相手である勤労協の概要を示しつつ、京都人文学園の改組の様相を描きたい。

#### 4 京都勤労者学園への改組

勤労協は、1953年10月に総評の黒田誠一や島恭彦、前川嘉一、細野武男ら知識人によって設立された、「勤労者の教育活動を促進し、援助することを目的とした」団体である<sup>39)</sup>。主な事業として、1954年7月から1956年までに8度の講座を労働者に向けて開催している（別表3）。

その講師陣に関して指摘しておくべきことは、先に京都人文学園夜間部の新設科目群の主な担当者として挙げた知識人たちの多くが講師を務めていることである。具体的には、岸本英太郎、細野武男、河野健二、岡本清一、前芝確三、島恭彦、西村幸雄、渡部徹が重なっている。

## 京都人文学園の形成と変容（奥村）

京都人文学園夜間部と勤労協の諸講座とは、別の組織として存立しつつも、その構成員たる知識人の多くが重なり合っていることが分かる。〈労働・政治運動の文脈〉を強めた京都人文学園は、総評を中心としてつくられた団体である勤労協と、教育内容の傾向をおよそ同じくしていたと言って良いだろう。教育内容や講師という点からみれば、同じ文脈を共有する京都人文学園夜間部と勤労協との合併は順接的に捉えることが出来る。

こうして1956年12月、渡部徹は「講師会議」において、ほとんど唯一の生き残り方策として勤労協との合併を提案し、明けて1月21日に京都人文学園、勤労協、京都府、京都市の四者による準備委員会が発足、3月30日に京都勤労者学園の誕生をみることになる。



図1 「京都勤労者学園設立総会」の様子（1956.3.30撮影、京都勤労者学園所蔵）

上に挙げた夜間部と勤労協講座との重なり合った講師陣はそろって京都勤労者学園の教壇に立った。そして初代学園長には、「友山荘」グループの中心、住谷悦治が就任した。

### おわりに —— 〈運動の文脈〉と〈教育の文脈〉の相互規定

本稿では、講義の担い手や教育内容に着目しつつ、京都人文学園の歴史を描いて来た。これまで見てきたように、京都人文学園は繰り返す財政難のために、大きな転機を二度経て来た。一度目は夜間制への移行であり、二度目は京都勤労者学園への改組である。本稿が示したのは、その転機に教育の担い手がいかに変わったのか、あるいは変わらなかったのかということである。本稿が用いて来た用語で換言すれば、講義を担当した知識人たちが属する〈運動の文脈〉の傾向が、〈労働・政治運動の文脈〉と〈文化運動の文脈〉との間でいかに揺れ動いたのかということを描いてきたと言えるだろう。本稿の終わりに、改めてその揺れ動きを整理しておこう。

1946年に創立された京都人文学園は、戦前期から関西の労働組合を基盤として運動に参加してきた住谷悦治ら「友山荘」グループと、雑誌や新聞での文芸批評を拠り所として来た新村

猛ら『世界文化』グループの合流によって誕生した。〈労働・政治運動の文脈〉と〈文化運動の文脈〉が重なり合ったところに、京都人文学園は創立されたと言える（1946年6月）。

ただし創立直後の京都人文学園において、住谷悦治らが講義を行うことはなかった。昼間制時代の京都人文学園では、「一般教養」を担当した新村猛と「論理学」「哲学」を担当した久野収を中心として、人文科学を基盤とした教育活動が展開された。同時期の住谷悦治は、〈労働・政治運動の文脈〉の色濃い地労協の「京都労働学校」で教育活動を行っている。いわば、〈労働・政治運動の文脈〉と〈文化運動の文脈〉が乖離し、京都人文学園では〈文化運動の文脈〉に根差した教育活動が展開されたのが昼間制時代であった（1946年6月-1949年3月）。

しかし昼間制各種学校の運営は順調にはいかず、京都人文学園は夜間制への移行に踏み切ることになる。この移行によって、講師陣に二つの変化が生じた。一つは、新村と久野の就職＝退場であり、もう一つは、地労協で活動していた知識人の参入であった。それに伴って、①社会思想系科目、②現代社会分析系科目、③労働問題系科目が追加され、「カリキュラム」の内の大きな比重を占めることになる。夜間制への移行は、京都人文学園の知識人が背景に持つ〈運動の文脈〉の内実が、〈文化運動の文脈〉から〈労働・政治運動の文脈〉へとその重心を移していくという変化でもあった。そして〈運動の文脈〉の重心の変化は、〈教育の文脈〉にも影響を及ぼしていたのである（1949年4月-1957年3月）。

ただ、夜間制への移行に踏み切ってさえ、財政難の克服には至らなかった。そこで、夜間制移行と同時に京都人文学園に参入して中核的な役割を担っていた渡部徹は、勤労協との合併によってその窮地を脱するという方策を講じる。勤労協は労働者に向けた教育活動を展開していた団体であった。この二度目の転機によっては、〈運動の文脈〉に大きな変化は生じなかった。勤労協の教育活動を担った知識人と、夜間制になってから京都人文学園に新設された科目の担当者は、多くの部分が重なり合っていた。いわば、〈運動の文脈〉の観点から見たとき、京都人文学園から京都勤労者学園への改組は、順接的に捉えることが出来る（1957年3月）。

こうして、名前の通り人文科学の教授と「後進の掖導」によって教育の変革を目指した京都人文学園は、夜間制への移行と同時に、労働者としての階級意識の涵養を通じた社会変革を志向する、社会科学中心の教育機関へとその〈教育の文脈〉を変容させつつ、京都勤労者学園として新たに活動を始めることとなった。新村猛や住谷悦治、渡部徹ら中心的な知識人たちが背景に持っていた〈運動の文脈〉は、「正規の」学校教育システム外にある「学校」に存立の理由と基盤を与える駆動力であると同時に、〈教育の文脈〉の内実の参照項でもあった。

附 記

本稿執筆に当たって、資料調査及び資料の公開に応じて頂いた京都勤労者学園（ラポール学園）の皆様、新村恭氏、川野邦造氏に心より御礼申し上げたい。

なお本稿は、JSPS 科研費（課題番号：23K12721）の助成を受けたものである。

注

- 1) ねずまさし「プチブルの同人雑誌『世界文化』『思想』（通号 629）、1976 年、1696 頁。
- 2) 同上、1706 頁。
- 3) 松尾尊允「敗戦直後の京都民主戦線」『京都大学文学部研究紀要』18、1978 年、184 頁。
- 4) 労働組合や政党（社会党や共産党など）を基盤にして社会運動を展開した知識人のなかに、亀裂や敵視が存在したこともまたおそらく自明であろう。また、住谷は労働組合運動の参加者と強い人的なつながりを持っていたが、必ずしもストライキなど実際の労働運動の現場に参加し、その指揮を執るなどといった意味で労働運動に参画していたわけではない（住谷一彦・住谷馨編『回想の住谷悦治』住谷一彦・住谷馨、1993 年、36 頁）。本稿では、あくまでも敗戦後の京都において、労働組合などに基盤を置かずに活動した知識人との弁別のためにこの分析概念を設定している。
- 5) 京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春：京都人文学園の記録』京都人文学園創立三〇周年記念世話人会、1967 年。
- 6) 前掲松尾「敗戦直後の京都民主戦線」、上野輝将「戦後京都における文化運動と知識人：戦後初期の『啓蒙・教育』運動を中心に」（『神戸女子薬科大学人文研究』(5)、1977 年、51-91 頁）、石田良三郎『京都地方労働者教育史』（京都勤労者学園、1979 年）など。
- 7) 山崎雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、2002 年。  
久田邦明「京都人文学園と学園新聞『水曜日』」『神奈川大学心理・教育研究論集』第 6 号、1999 年、35-45 頁。
- 8) 前掲京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春』、37-39 頁に所収。
- 9) 前掲山崎『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』、103 頁。
- 10) 同上、109-110 頁。
- 11) 以下、住谷の略歴に関しては、田中秀臣『沈黙と抵抗：ある知識人の生涯、評伝・住谷悦治』（藤原書店、2001 年）に依っている。
- 12) 新人会とは、1918（大正 7）年 12 月 5 日に、吉野作造の影響を受けた東京帝大の学生たちによって形成された団体である（石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』経済往来社、1976 年、3 頁）。創設者のひとり赤松克麿は、住谷が入会した 1919（大正 8）年の時点で大日本労働総同盟友愛会（のちの日本労働総同盟）に参画しており、住谷は赤松の演説によって「社会問題」への関心を深めた旨を回想している（日本科学者会議編『科学者のあゆんだ道 下』水曜社、1982 年、13-15 頁）。
- 13) 住谷悦治『住谷悦治日記：一九三三（昭和八）年』（田中智子翻刻、同志社大学人文科学研究所、2020 年）のうち、11 月 6 日及び 11 月 12 日の記述。
- 14) 同上、106-107 頁。
- 15) 住谷悦治「一つの歴史：京都労働学校のこと」住谷悦治『研究室うちと』大阪福祉事業財団

京都補導所, 1957年, 238頁。

- 16) 同上。
- 17) なお, 本稿で「京都人文学園」と呼称している機関は, 厳密には京都人文学園の「人文学部」と呼ばれる組織である。京都人文学園はそのほかに「絵画研究所」「音楽研究所」「工芸研究所」という三つの部門を持っており, それぞれ(五), (四), (三)が具体化されたものである。
- 18) 大阪労働学校とは, 1922(大正11)年に賀川豊彦によって設立され, のちには高野岩三郎や森戸辰男によって運営された, 労働者に向けた教育空間である。詳しくは法政大学大原社会問題研究所編『大阪労働学校史: 独立労働者教育の足跡』(法政大学出版局, 1982年)を参照。

なお, 拙稿「大阪労働学校における教育目的の変遷」(『公教育計画研究』(9), 2018年, 112-127頁)では知識人の側から, 同「戦前期労働者の学習ニーズと学習経験: 大阪労働学校山崎宗太郎の場合」(『社会教育学研究』54, 2018年, 57-66年)では労働者の側から, 大阪労働学校という空間が帯びた意味について検討している。
- 19) 新村の戦前期における「文化活動」については, 新村猛『新村猛著作集 第二巻『世界文化』三十年代の政治思想的証言』(三一書房, 1994年)に依っている。
- 20) 『土曜日』の概要については, 『復刻版 土曜日』(三一書房, 1974年)に依っている。
- 21) 綿貫ゆり「反ファシズムの烽火: 『世界文化』と『土曜日』」『千葉大学人文公共学研究論集』38, 2019年, 197-214頁。
- 22) 前掲住谷『住谷悦治日記』, 1933年7月10日の記述。
- 23) 『土曜日』創刊以前に住谷が『文藝春秋』に投稿した記事は以下のものである。
  - ・住谷悦治「學界メリー・ゴー・ラウンド」『文藝春秋』第十一年第一号, 1933年1月, 126-132頁。
  - ・住谷悦治「登張竹風と土井晚翠」同第十二年第三号, 1934年3月, 82-92頁。
  - ・住谷悦治「上海夜話: 本社海外特派員第一信」同第十二年第七号, 1934年7月, 200-208頁。
  - ・住谷悦治「ヒットラアの閃光的行動: その劇的な逮捕光景と陰謀の真相」同第十二年第九号, 1934年9月, 158-169頁。
  - ・住谷悦治「ロンドンの街頭藝術家」同第十二年第十二号, 1934年12月, 114-120頁。他に, 国府亮一のペンネームで「ナチスの秘密警察」(同第十二年第十一号, 1934年11月)という記事も投稿している。いずれの号にも執筆者の住所を掲載した「寄稿家紹介」の欄があるため, 斎藤がどの記事を読んで住谷のもとを訪れたのかは現状では定かではない。
- 24) 斎藤雷太郎「『土曜日』について」『復刻版 土曜日』三一書房, 1974年, 8頁。
- 25) 注8)と同様。
- 26) 京都人文学園が各種学校であったことの意味については, 本小特集の須永論文が考察を深めている。
- 27) 前掲京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春』, 50頁。
- 28) 前掲上野「戦後京都における文化運動と知識人」, 64頁。
- 29) 前掲石田『京都地方労働者教育史』, 307頁。
- 30) 前掲京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春』, 101頁。
- 31) 前掲石田『京都地方労働者教育史』, 313頁。
- 32) ここで「主な担当者」とは, 同領域での講義を複数回担当した人物のことを指している。
- 33) 山本宏宏『戦後民主主義: 現代日本を創った思想と文化』(中央公論新社, 2021年, 44頁), 及び大河内一男『戦後日本の労働運動』(岩波書店, 1955年)を参照した。



京都人文学園の形成と変容（奥村）

- 34) 前掲石田『京都地方労働者教育史』, 245 頁。
- 35) 前掲京都人文学園創立三〇周年記念世話人会編『わが青春』, 100 頁。
- 36) 「12 月 1 日 講師会議記録」, 6 頁（本小特集資料編の翻刻資料Ⅳ）。
- 37) 渡部徹に関しては、本小特集の福家論文が、特にその学問について詳しく論じている。
- 38) 『京都勤労者学園』第 136 号, 4 頁。
- 39) 前掲石田『京都地方労働者教育史』, 357 頁。

人 文 学 報

別表1 京都人文学園の

	1946	1947	1948(+1949) (←昼間制)	1949 (夜間制→)	1950
①	新村 猛 一般教養	新村 猛 一般教養	新村 猛 一般教養	新村 猛 一般教養	新村 猛 一般教養
②	久野 取 論理学	久野 取 論理学			
		久野 取 哲学			
			田中美知太郎 哲学	田中美知太郎 哲学	
			鈴木 亨 哲学		
				堀 喜望 哲学	
					山元 一郎 哲学
					高橋 庄治 哲学
③	藤谷俊雄 日本史		藤谷俊雄 日本史	藤谷俊雄 日本史	藤谷俊雄 日本史
			岩井忠熊 日本史	岩井忠熊 日本史	岩井忠熊 日本史
			北山茂夫 日本史		北山茂夫 日本史
	前川貞次郎 西洋史		市川承八郎 西洋史		市川承八郎 西洋史
					河野健二 西洋史
				北村敬直 現代史	北村敬直 現代史
				市川承八郎 現代史	
				木原正雄 現代史	
			細野武男 現代史	細野武男 現代史	
				前芝確三 現代史	
			森 修 国文学		
			北村敬直 東洋史		
	重沢俊郎 東洋史				
④	重松俊明 社会学	重松俊明 社会学	杉ノ原寿一 社会学		
⑤	青山秀夫 経済学	青山秀夫 経済学	青山秀夫 経済学		
			島津亮二 経済学		
				上田作之助 経済学	上田作之助 経済学
				名和統一 経済学	
				堀江英一 経済学	堀江英一 経済学
				島 恭彦 経済学	島 恭彦 経済学
					岸本誠二郎 経済学
			大橋隆憲 会計学		

①一般教養 ②論理学・哲学系科目 ③歴史学系科目 ④社会学系科目 ⑤経済学系科目  
 ⑥法学系科目 ⑦時事解説 ⑧自然科学系科目 ⑨基礎教養科目 ⑩語学系科目 ⑪社会思想系科目  
 ⑫現代社会分析系科目 ⑬労働問題系科目 ⑭芸術系科目 ⑮その他少数回開講科目

京都人文学園の形成と変容（奥村）

科目・担当者一覧

1951		1952		1953		1954		1955		1956	
新村 猛	一般教養	新村 猛	一般教養	新村 猛	教 養	新村 猛	教 養	新村 猛	一般教養	新村 猛	一般教養
						和田洋一	教 養				
						北村敬直	教 養				
						藤谷俊雄	教 養				
						中井宗太郎	教 養				
						北川鉄夫	教 養				
田中美知太郎	哲 学	田中美知太郎	哲 学	田中美知太郎	哲 学	田中美知太郎	哲 学				
鈴木 亨	哲 学	鈴木 亨	哲 学	鈴木 亨	哲 学	鈴木 亨	哲 学				
		山元 一郎	哲 学	山元 一郎	哲 学	山元 一郎	哲 学	山元 一郎	哲 学	山元 一郎	哲 学
梯 明秀	哲 学										
						阿部敬吾	哲 学			阿部敬吾	哲 学
								小松祺郎	哲 学		
										梅原 猛	哲 学
藤谷俊雄	日 本 史					藤谷俊雄	日 本 史				
岩井忠熊	日 本 史	岩井忠熊	日 本 史					岩井忠熊	近代日本史		
北山茂夫	日 本 史			北山茂夫	歴 史	北山茂夫	日 本 史				
渡部 徹	日 本 史										
		上田正昭	日 本 史								
		井ヶ田良治	日 本 史								
								奥田修三	近代日本史		
										黒田俊雄	日 本 史
		市川承八郎	世 界 史	市川承八郎	歴 史						
		星田輝夫	世 界 史								
										山本幹男	西 洋 史
						堀江英一	歴 史				
堀江英一	経 済 学	堀江英一	経 済 学			堀江英一	経 済 学				
島 恭彦	経 済 学							島 恭彦	経 済 学		
内海義夫	経 済 学										
岸本誠二郎	経 済 学										
				住谷悦治	経 済 学			住谷悦治	経 済 学		
				前芝確三	経 済 学						
								前川嘉一	経 済 学		
										後藤 靖	経 済 学
										平井俊彦	経 済 学
										小野 一郎	経 済 学

人 文 学 報

	1946		1947		1948 (+1949) (←昼間制)		1949 (夜間制→)		1950	
⑥	佐々木時雄	政治学								
			永井道雄	政治学	永井道雄	政治学				
			岡田良夫	政治学	岡田良夫	政治学				
			滝川春雄	法律学	滝川春雄	法律学				
			恒藤武二	法律学						
							西村信雄	法律学	西村信雄	法律学
					宮内 裕	法律学	宮内 裕	法律学		
					熊谷開作	法律学				
									末川 博	法律学
									西村幸雄	法律学
									岡田良夫	国家論
⑦			佐々木時雄	時事解説	佐々木時雄	時事解説				
⑧	市川亀久弥	自然科学	市川亀久弥	自然科学	井上 健	自然科学				
					山内年彦	生物学				
⑨	濱田 敦	国語								
	田中益造	数学	田中益造	数学						
⑩	梅田武文	華語	梅田武文	華語	梅田武文	華語				
	加藤美雄	仏語			新村 猛	仏語				
	菅 泰男	英語	菅 泰男	英語上級	菅 泰男	英語上級				
			山田 ○	英語初級	玉木意思太郎	英語初級・中級				
			三島泰治	英語中級	飯沼 馨	英語				
⑪	佐竹 尚	露語	小林 尚	露語	小林 尚	露語				
	白井竹次郎	独語			白井竹次郎	独語				
			栗栖 継	エスペラント						
					佐々木時雄	エスペラント				
							和崎洋一	エスペラント		
									一木 誠也	エスペラント
								足利末男	エスペラント	
⑫							岸本英太郎	社会思想史		
							細野武男	社会思想史	細野武男	社会思想
									鶴見俊輔	社会思想
⑬										

①一般教養 ②論理学・哲学系科目 ③歴史学系科目 ④社会学系科目 ⑤経済学系科目  
 ⑥法学系科目 ⑦時事解説 ⑧自然科学系科目 ⑨基礎教養科目 ⑩語学系科目 ⑪社会思想系科目  
 ⑫現代社会分析系科目 ⑬労働問題系科目 ⑭芸術系科目 ⑮その他少数回開講科目

京大文学部の形成と変容（奥村）

1951		1952		1953		1954		1955		1956	
										清水慶三	政治学
		西村信雄	法学								
				宮内 裕	法学	宮内 裕	法学			宮内 裕	法学
西村幸雄	法学	西村幸雄	法学	西村幸雄	法学						
岡田良夫	国家論										
田畑 忍	法学	田畑 忍	法学	田畑 忍	法学	田畑 忍	法学				
				浅井清信	法学			岡本清一	法と政治		
								富山康吉	法と政治	富山康吉	法学
山内年彦	自然史										
				安藤昭一	英語	安藤昭一	英語	安藤昭一	英語		
				永原 誠	英語	永原 誠	英語	永原 誠	英語		
								田中健一	英語		
佐々木時雄	エスバラント										
岸本英太郎	社会思想	岸本英太郎	社会思想								
細野武男	社会思想	細野武男	社会思想	細野武男	社会思想			細野武男	社会思想		
				奈良本辰也	社会思想						
河野 健二	現代の社会					河野 健二	社会発展史				
鶴見 後輔	現代の社会										
松井七郎	現代の社会										
市川承八郎	現代の社会										
岡本清一	現代の社会			岡本清一	現代の解明						
前芝 確三	現代の社会	前芝 確三	現代の解明			前芝 確三	現代の世界	前芝 確三	世界の現勢		
北村敬直	現代の社会	北村敬直	現代の解明	北村敬直	現代の解明						
里井彦七郎	現代の社会	里井彦七郎	現代の解明								
		尾崎彦朔	現代の解明	尾崎彦朔	現代の解明						
		島 恭彦	現代の解明	島 恭彦	現代の解明						
		内海義夫	現代の解明	内海義夫	現代の解明						
		渡部 徹	現代の解明								
				木原正雄	現代の解明	木原正雄	現代の世界	木原正雄	世界の現勢		
				松井 清	現代の解明						
								堀江英一	社会発展史		
								後藤 靖	社会発展史		
								池田 誠	世界の現勢		
								岡倉吉志郎	世界の現勢		

人 文 学 報

	1946	1947	1948 (+1949) (←昼間制)	1949 (夜間制→)	1950
⑬					前 芝 確 三 世界労働運動史
⑭			中井宗太郎 芸術論		
			長広敏雄 芸術論	長広敏雄 芸術論	
			北野正男 芸術論	北野正男 芸術論	
				菅 泰男 芸術論	菅 泰男 芸術論
				尾瀬敬止 芸術論	尾瀬敬止 芸術論
				白井竹次郎 芸術論	白井竹次郎 芸術論
				宮本正清 芸術論	
				森 修 芸術論	
				北川鉄夫 芸術論	北川鉄夫 芸術論
				桑原武夫 芸術論	桑原武夫 芸術論
					飯沼 馨 芸術論
⑮			武田弘道 心理学		

- ①一般教養 ②論理学・哲学系科目 ③歴史学系科目 ④社会学系科目 ⑤経済学系科目  
 ⑥法学系科目 ⑦時事解説 ⑧自然科学系科目 ⑨基礎教養科目 ⑩語学系科目 ⑪社会思想系科目  
 ⑫現代社会分析系科目 ⑬労働問題系科目 ⑭芸術系科目 ⑮その他少数回開講科目

京都人文学園の形成と変容（奥村）

1951		1952		1953		1954		1955		1956	
乙川文夫	労働運動										
				西村幸雄	労働問題	西村幸雄	労働問題	西村幸雄	労働問題		
				渡部 徹	労働問題	渡部 徹	労働問題	渡部 徹	労働問題	渡部 徹	労働問題
						前川嘉一	労働問題				
								岸本英太郎	労働問題	岸本英太郎	労働問題
										片岡 昇	労働問題
										小倉襄二	労働問題
		高桑末秀	時事問題	高桑末秀	時事問題			高桑末秀	時事問題	高桑末秀	時事問題
中井宗太郎	芸術・絵画							中井宗太郎	芸術論		
白井竹次郎	芸術・文学										
北川鉄夫	芸術・映画							北川鉄夫	芸術論		
桑原武夫	芸術・文学			桑原武夫	文 学	桑原武夫	文 学	桑原武夫	芸術論		
飯沼 馨	芸術・文学			飯沼 馨	文 学						
榊原美文	芸術・文学										
園部三郎	芸術・音楽										
野上素一	芸術・文学										
尾崎彦明	芸術・文学										
千田是也	芸術・演劇										
				安永武人	文 学	安永武人	文 学	安永武人	文 学	安永武人	文 学
				和田洋一	文 学						
				植野修司	文 学						
				金子二郎	文 学						
						新村 猛	文 学				
								多田道太郎	文 学		
								桜井武雄	芸術論		
										平林 一	文 学
星野元豊	宗教論										
吉村正一郎	ジャーナリズム論										
				藤谷俊雄	自由研究						
				前川嘉一	自由研究						
				高桑末秀	自由研究						
								河野健二	自由研究		
								上山春平	自由研究		

別表2 京都地方労働組合協議会「京都労働学校」の

第1期 (1947. 7. 1～1947. 9. 30)		第2期 (1947. 10. 3～1947. 12. 26)		第3期 (1948. 1. 16～1948. 3. 31)		第4期 (1948. 4. 19～1948. 6. 14)	
欧米および日本における近代社会の発達	堀江英一	欧米および日本における近代社会の発達	堀江英一	欧米および日本における近代社会の発達	堀江英一	世界における労働運動の現状	関原利夫
欧米および日本における労働運動の発達	松井七郎	欧米および日本における労働運動の発達	松井七郎	欧米および日本における労働運動の発達	松井七郎	労働組合の役割と日本における労働組合の現状	井家上専
日本における労働政策の変せん	岸本英太郎	日本における労働政策の変せん	岸本英太郎	日本における労働政策の変せん	岸本英太郎	労働協約と団体交渉	松井七郎
日本における労働運動の現状	沼田稲次郎	日本における労働運動の現状	沼田稲次郎	日本における労働運動の現状	沼田稲次郎	労働委員会について	於保不二夫
日本社会思想史	住谷悦治	日本社会思想史	住谷悦治	日本社会思想史	住谷悦治	労働者教育に就て	松井七郎 石田良三郎
経済学の基礎知識及び協同組合論	蜷川虎三	経済学の基礎知識及び協同組合論	蜷川虎三	経済学の基礎知識及び協同組合論	蜷川虎三	労働組合と文化活動	北川鉄夫
欧米における近代精神と宗教	久野 収	欧米における近代精神と宗教	久野 収	欧米における近代精神と宗教	久野 収	日本憲法と労働者	末川 博
自然科学の発達と日本	小林恵之助	自然科学の発達と日本	小林恵之助	自然科学の発達と日本	小林恵之助	労働者の法律常識	滝川春雄
近代における技術の発達と日本	鳥 恭彦	近代における技術の発達と日本	鳥 恭彦	近代における技術の発達と日本	鳥 恭彦	労働組合法の解説	磯川 哲
日本憲法の開設	田畑 忍	日本憲法の開設	田畑 忍	日本憲法の開設	田畑 忍	労働関係調整法の解説	沼田稲次郎
労働組合法の解説	磯村 哲	労働組合法の解説	磯村 哲	労働組合法の解説	磯村 哲	労働基準法の解説	浅井清信 二宮竜二
労働組合関係調整法解説	高山義三	労働組合関係調整法解説	高山義三	労働組合関係調整法解説	高山義三	社会保険制度について	平田隆夫 岡田久造
労働基準法解説	末川 博	労働基準法解説	末川 博	労働基準法解説	末川 博	近代社会と自由主義精神	久野 収
労働組合の組織と運営	井家上専	労働組合の組織と運営	井家上専	労働組合の組織と運営	井家上専	資本主義経済の発達と我国におけるその特質	堀江英一
公衆衛生	今村久吉郎	公衆衛生	今村久吉郎	公衆衛生	今村久吉郎	我国における労働運動と労働政策の発達	岸本英太郎
社会医学	松田道雄	社会医学	松田道雄	社会医学	松田道雄	働く者の経済学(1) 戦後における日本経済	上田作之助
音楽指導、社会見学	荒川盛亮 武松豊子	音楽指導、社会見学	荒川盛亮 武松豊子	音楽指導、社会見学	荒川盛亮 武松豊子	働く者の経済学(2) 賃金と物価	上田作之助
その他、文学、演劇、映画	貴司山治 北川鉄夫 位田義賢	その他、文学、演劇、映画	貴司山治 北川鉄夫 位田義賢	その他、文学、演劇、映画	貴司山治 北川鉄夫 位田義賢	我国における婦人と労働	名和統一
		労働組合の組織とその民主的運営	小川広之介	労働組合の組織とその民主的運営	小川広之介	労働者と保険	松田道雄
		労働協約と団体交渉	西橋富彦	労働協約と団体交渉	西橋富彦	時事解説	高桑末秀
		労働組合と財政	山脇一男	労働組合と財政	山脇一男		
		労働組合と政治活動	西田 悟	労働組合と政治活動	西田 悟		
		労働組合と調査活動	中江平次郎	労働組合と調査活動	中江平次郎		
		労働組合と文化活動	中川忠次	労働組合と文化活動	中川忠次		
				企業整備と失業問題	中江平次郎		
				金融と財政問題	鳥 恭彦		
				労働者と宗教	久野 収		
				婦人問題	名和統一		



京都人文学園の形成と変容（奥村）

科目・担当者一覧

夏季夜間労働講座 (1948. 7. 2～1948. 9. 17)		京都夜間労働講座第一期 (1948. 10. 1～1948. 12. 17)		京都夜間労働講座第二期 (1949. 1～1949. 4)		第 5 期 (詳細不明)		第 6 期 (詳細不明)	
労働組合と教育	末川 博	資本主義経済の構造	野々村一雄	経済学の基礎理論	野々村一雄				
労働組合運動の歴史	岸本英太郎 渡部 徹	金融資本の発展	細野武男	金融資本に就て	鳥 恭彦				
労働運動の現状	細野武男	社会主義の現段階	名和統一	社会主義に就て	細野武男 木原正雄				
民主的労働組合について	モ ラ ン	最近の資本攻勢	岸本英太郎	哲学のはなし	森 信成				
労働組合の規約	高橋貞三	一般的危機と財政	鳥 恭彦	労働法概論	沼田稲次郎				
労働協約と団体交渉	松井七郎	日本経済の立場より 見た労賃論	上田作之助	日本経済の動向	斉藤栄治 中江平次郎				
労働紛争の処理・ 斡旋・調停・仲裁	関原利夫	民主主義の基本原理	田中美知太郎	農村問題	内海義夫				
就業規則	二宮竜二	近代哲学の歴史	堀 喜望	労働者と国際経済	松井 清				
経済の知識	上田作之助	唯物弁証法	栗原 佑	日本資本主義の成立	堀江英一				
戦後の日本経済	野々村一雄			哲学のはなし	森 竜吉				
企業整備	中江平次郎			労働法概論	沼田稲次郎				
農村について	山田幸次			政治史	新村 猛				
総同盟について	小川広之介								
産別について	浅川 享								
全官公について	山脇一男								
K・K・Rについて	西橋富彦								
時事解説	高桑末秀								

別表3 京都勤労者教育協会の教育活動に

一九五四年夏季労働講座 (1954. 7. 19~1954. 8. 2)		一九五四年夏季労働大学		一九五四年十一月講座		一九五五年春期労働学校 (1955. 3. 14~1955. 6. 30)	
世界をめぐる諸問題と日本	岡倉古志郎			デフレ政策を巡る政治と経済	前 島 昭 三	資本主義経済のカラクリ	吉 村 達 次
デフレ政策と日本経済	松 井 清			国内の経済情勢	島 恭 彦	現代資本主義と社会主義	武 藤 守 一
戦後労働運動の諸問題	渡 部 徹			国際情勢 (特に中国を中心に)	武 藤 守 一	人生と社会についての考え方	細 野 武 男
法律と労働組合	浅 井 清 信			デフレ下の労働運動	西 村 豁 通 那 須 亮 二	勤労者と文化	安 永 武 人
賃金理論と賃金闘争	前 川 嘉 一					労働者の団結権	恒 藤 武 二
経済危機下の労働者と農民	山 岡 亮 一					職場の法律問題	片 岡 昇
産業合理化と中小企業	今 井 俊 一					労働運動と基本権	宮 内 裕
						平和と民族の諸問題	岡倉古志郎
						現代国家と議会政治	岡 本 清 一
						明治時代	岩 井 忠 熊
						戦前	井 ヶ 田 良 治
						戦後	井 上 清
						労働組合の基礎理論	岸 本 英 太 郎
						戦後日本の労働運動	西 村 豁 通
						婦人・少年の労働問題	前 田 薫
						当面の労働運動の問題点と今後の方向	滝 田 実
						当面の労働運動の課題	塩 谷 信 雄
						文化問題	末 川 博 桑 原 武 夫

京都人文学園の形成と変容（奥村）

おける科目・担当者一覧

一九五五年秋期労働学校 (1955. 10. 3~1955. 12. 9)		一九五六年春期労働学校 (1956. 5. 22~1956. 6. 15)		一九五六年夏期労働学校		一九五六年秋期労働学校	
経済学初級	住谷悦治 中西健一 島恭彦	労働組合法	片岡昇	議会と労働者	岡本清一	日ソ交渉をめぐる	立川文彦
哲学初級	山元一郎 細野武男 阿部敬吾	労働基準法	西村幸雄	日本から見た国際情勢	田畑茂二郎	働く人達の健康	松田道雄
日本史初級	北山茂夫 前田一良 岩井忠熊 井上清	労働刑法	宮内裕	日本経済はどう動くか	松井清	労働組合のサークル活動	永井道雄
経済学中級	西村監通 吉村達次 今井俊一	資本主義の成立	河野健二	最低賃金について	渡部徹	アジア・アフリカの動き	前芝確三
手芸班	生島光子	賃金	岸本英太郎	文学の意味	和田洋一	生産性向上運動とは	三戸公
		恐慌	小野義彦	勤労者と詩	小野十三郎	生産性向上運動と 中小企業	今井俊一
		帝国主義的段階に おける一般的危機	立川文彦	戦後の代表作品を語る	多田道太郎	最低賃金制とは	岸本英太郎
		国際情勢	岡倉古志郎	文学と世相	安永武人	最低賃金制と生産性 向上運動	渡部徹
		原子力の平和利用	四手井綱彦				
		平和憲法	末川博				
		当面する労働運動	藤田藤太郎				

## 要 旨

本稿の目的は、講義の担い手や教育内容に着目しつつ、京都人文学園の形成と変容の過程を描くことである。同学園を含む「正規の」学校教育システム外に創られた「学校」の多くは、「教育」の変革を志向する思想（＝〈教育の文脈〉）と、運動の担い手の養成などの社会運動の要請（＝〈運動の文脈〉）との交差点上に形成されてきた。また〈運動の文脈〉は一枚岩ではなく、京都人文学園の場合には、住谷悦治ら労働組合や政党に基盤を置く知識人たち（＝〈労働・政治運動の文脈〉）と、新村猛ら文学・美術評論などの文化批判に基盤を置く知識人たち（＝〈文化運動の文脈〉）の合流と拡散のうえに学園が存続してきた。

1946年に創立された京都人文学園は、住谷悦治ら「友山荘」グループと、新村猛ら『世界文化』グループの合流によって、昼間制の各種学校として誕生した。

ただし創立直後に住谷悦治らが講義を行うことはなく、昼間制時代の京都人文学園では、新村猛らを中心に人文科学を基盤とした教育活動が展開された。いわば、〈労働・政治運動の文脈〉と〈文化運動の文脈〉が乖離し、〈文化運動の文脈〉に根差した教育活動が展開されたのが学園の昼間制時代であった（1946年10月-1949年3月）。

しかし昼間制の学園は財政危機に陥り、夜間制への移行に踏み切ることになる。この移行によって、講師陣に二つの変化が生じた。一つは、新村と久野の就職＝退場であり、もう一つは、京都地方労働組合協議会で活動していた知識人（住谷悦治も含まれる）の参入であった。夜間制への移行は、知識人の〈運動の文脈〉の内実が、〈文化運動の文脈〉から〈労働・政治運動の文脈〉へと重心を移していくという変化でもあった（1949年4月-1957年3月）。

それでも財政難の克服には至らず、学園は京都勤労者教育協会との合併を決断する。同協会に参加していた知識人は夜間制京都人文学園と重なり合っており、この二度目の転機によっては、〈運動の文脈〉に大きな変化は生じなかった。（1957年3月）。

キーワード：京都人文学園、京都勤労者学園、京都労働学校、知識人、社会運動

## Abstract

The purpose of this paper is to describe the formation and transformation process of the Kyoto Jinbun Gakuen, focusing on its lecturers and educational content. Many of the “schools” created outside the formal schooling system were formed at the intersection of [educational context] (ideas oriented toward the transformation of education) and [movement context] (the training of movement leaders).

In the case of the Kyoto Jinbun Gakuen, the school has survived on the confluence and diffusion of intellectuals based on labor unions and political parties, such as the “Yuuzanso” group represented by Etsuji Sumiya ([labor and political movements context]) and those based on cultural criticism, such as the “Sekai Bunka” group represented by Takeshi Shinmura ([cultural movements context]).

Kyoto Jinbun Gakuen was founded in 1946 by the merger of the two groups above. Sumiya did not give lectures immediately after the founding of the school, so educational activities based on the humanities were developed, led by Shinmura. (October 1946–March 1949).

However, the daytime school was in financial crisis and had to make the transition to a nighttime system. This transition led to the entry of intellectuals who had been active in the Kyoto Labor School (including Sumiya). The shift means a change in the context of the intellectuals' [movement context], shifting from the [cultural movement context] to the [labor and political movement context] (April 1949–March 1957).

Still unable to overcome its financial difficulties, the school decided to merge with the Kyoto Workers' Education Association. The merge did not result in a major change in the [context of the movement] (March 1957).

**Keywords:** Kyoto Jinbun Gakuen, Labor Gakuen, Kyoto Labor School, Intellectual, Social movement